

原点
回帰
be myself

Naomi Harada

原田尚美

さん

東京大学大気海洋研究所 国際・地域連携研究センター教授
第66次南極地域観測隊隊長



「隊長だから」と気負わずに
相手を信じ、委ね、
そっと背中を押す

後から分かった かつての恩師の言葉の意味

私は北海道の苫小牧で育ちました。小中高を通して、引っ込み思案の完全インドア派。授業でも当てられないように、先生と目を合わせないようにしていたくらいです(笑)。本が好きだったので、子どものころの将来の夢は国語の先生。高校で有機化学の面白さに目覚めてからは、理科の先生もいいなと思ったこともあります。

印象に残っている先生は何人か思い浮かびますが、1人は中学時代の英語の先生です。新卒の男性教諭で、そ

れまでがベテランの先生ばかりだったこともあり「こんなお兄さんみたいな先生がいるんだ!」と、いい意味で驚いたことを覚えています。ベテランの先生には安心感がある一方で、新人の先生には自分と年齢が近いという親近感があり、授業そのものにも親しみを持って臨めたように思います。もう1人は高校時代の担任の先生です。のんびりした雰囲気ベテラン男性教諭で、大学受験のことで相談しに行ったら「自分のことは自分で決めて、自分でやらないといけない」という感じの回答だったんです。細やかな助言を期待していた当時の私には、なんだか頼りない先生に見えてしまい「私がしっかりしないとダメだ!」と

自分に言い聞かせました。でも、後から分かったんです。「あれは、生徒一人一人が、自分の道を悔いることのないよう自分で決めて、自分の足で歩いていけるようにするための導き方だったんだな」と。

南極の地に立って 初めて気付いたこと

南極に興味を持つようになったのは、大学時代の指導教官との出会いがきっかけです。その先生はアメリカの南極観測隊に参加されたご経験をお持ちで、事あるごとに、自然のスケールの大きさや、フィールドワークの面白さなどを臨場感たっぷりに話してくださいました。また、「極」という普通はなかなか行けない場所であることも、私の好奇心を掻き立てたのだと思います。いつしか「私もその地に立ってみたい」と、南極という場所に思いを馳せるようになりました。「インドア派の私になぜ？」と自分でも思ったのですが、母曰く、幼少期の私は、雪が降ると自ら帽子をかぶり、ヤッケを着て、嬉々として外に出て行って遊んでいたらしいのです。もしかすると、心の奥底には、自然への興味のようなものがずっとあったのかもしれない。

大学院生の時にチャンスに恵まれ、第33次隊(1991-1992)への参加が叶いました。実際に南極に降り立った時の最大の驚きは「完全に無音の世界」だったこと。景色や寒さのことは想像できていたのですが、音に関しては誰からも聞いたことがなかったため、すごく新鮮な驚きだったんです。その時に「人からどれだけ話を聞いて想像を巡らせていても、現場に自分の足で立って初めて気が付くことがあるんだ」と強く思いました。

2025年3月、南極観測船「しらせ」の艦内で、日本向けにインスタライブ中継を行っているところ

失敗と挫折から学んだ 目標に向かう時の心の持ち方

実は、最初の参加では大きな失敗をして、大きな挫折感と共に帰国しました。私には、南極観測船「しらせ」の往路で観測器を海に設置し、復路でそれを回収するという役目が与えられていたんです。ところが、復路で回収を試みたところ、観測器が見つからなくて。氷山が動いた時に一緒に持っていかれた可能性が高く「もっと別の設置方法があったのでは？」と、後悔と反省を繰り返しました。今なら「自然科学を相手にしているのだから、思い通りにいかなくて当たり前」と思えるのですが、当時はそうした心持がなかったため、本当にショックでした。研究者に限らず、何かに取り組む時に「希望は常に持ちながらも、期待をしすぎない」という心の持ち方は、挫折することなく目標や目的に向かっていく時に、とても大切なことだと思います。

直近の第66次隊(2024-2025)では33年前の宿題をしてきました。観測器の回収は2025年12月に出発予定の第67次隊に委ねることになります。無事に回収されるのを「期待をしすぎず」待っているところです！

研究者としての原点となった 母とのマラソン特訓

第66次隊では隊長を務めましたが、私は「自分が頑張らないと!」と気負うのではなく、「相手を信じ、委ね、背中をそっと押すこと」を大切にしていました。そうすることで、司令塔である私は効率よく仕事ができ、委ねられた側もより成長できたように思います。

今、研究者の卵である大学院生に教える立場として意



識していることは、教えずぎないこと。私が最もワクワクするのは、研究過程における「何か面白そうなものが見つかりそう!」とか「今、これを知っているのは私だけ!」という瞬間なので、教え子たちにもそのワクワクを体験してほしいんです。そして、次世代を担う子どもたちには「絶対に無理」と思ったことでも「努力で可能になることがある」と信じ、まずは努力をしてみてもいいですね。実は、私も小学校2年生の時に「完走は絶対に無理」と思ったマラソン大会があったのですが、母と毎日のように町内を走った結果、少しずつ走れるようになり、完走できたという経験があります。「最初から諦めないこと」「こつこつ努力をすること」は、研究者に不可欠な要素だと思うと、私の原点は母との特訓にあると言えます。

原田 尚美さんから読者の皆さんへ
ボイスメッセージが聞けます!!



わたしの 本棚



“本棚を見れば、
その人が見えてくる”

原田 尚美さんが自分の本棚から
ピックアップした3冊とは？

01



風と共に去りぬ

著：マーガレット・ミッチェル 訳：荒 このみ 岩波書店

高校生の時に読んだ1冊です。南北戦争時代のアメリカ南部が舞台。大農園「タラ」に生まれ、裕福に育ったスカーレット・オハラを軸に、戦争や奴隷制度についても描かれています。スカーレットのキャラクターは強烈！物語の最後、1人になってもタラの地で前向きに生きようとするスカーレットの強さが印象に残っています。

02



赤毛のアン

著：ルーシー・M・モンゴメリ 訳：村岡 花子 講談社

皆さんよくご存知の物語。孤児院からマシューとマリラに引き取られた赤毛の女の子、アン・シャーリーの成長譚です。初めて読んだのは小学生の時、アンのユニークな空想癖がとても面白かったのを覚えています。赤い髪をはじめ、劣等感の強いアンが、周囲の素敵な大人に見守られ、立派に成長していく姿に感動しながら読んだ1冊。

03



大地

著：パール・バック 訳：新居 格 補訳：中野 好夫 新潮社

19世紀後半から20世紀初頭の中国の農村が舞台。貧しい農家の主人公が妻を迎え、さまざまな困難に遭遇しながらも有力者へと成功していく物語です。当時の中国文化、思想、歴史がよく理解できるのもこの作品の魅力。この本で、上流階級の女性への纏足(てんそく)について知り、実在した差別にショックを受けたことを覚えています。

Profile

はらだ・なおみ 北海道生まれ。弘前大学理学部地球科学科卒業。名古屋大学大学院在学中の24歳の時に第33次南極地域観測隊(1991-1992)に、唯一の女性隊員として参加。第60次隊(2018-2019)では副隊長を、3回目の参加となる第66次隊(2024-2025)で女性初の隊長を務める。生物地球化学、古海洋学を専門とする地球科学者。2022年より東京大学大気海洋研究所 国際・地域連携研究センター教授。



原田 尚美さんの Must BUY Present

かがやきさんの東京で1番!クイズ(P33)
正解者の中から、原田尚美さんオススメの
「十勝日誌(21個入)」「六花亭」を
プレゼント!
たくさんのご応募お待ちしております!

